

# 労働者協同組合運動に参加して やっと10年

～振り返ると、いつも「社会」は私にまわりついていて～

花崎 昌子（栗東地域福祉事業所 ヘルパーステーション「ふくろうの家」所長）

## はじめに

先日、事務局員の面談というのが東京であり、全員の中で1番最初に受けることとなりました。何かにつけ、トップという経験の乏しい人生を、最近は送っていますのでワクワクでした。私もやっと労働者協同組合運動に参加して10年を迎えます。この面談へは、自分自身の生い立ちの中で、社会に対する目がどのように現れていたかなあ……と思いだしながら、生まれてからの年表をつくって提出してみました。こんな年表を見してくれる職場は日本中どこにもないだろうなあと思いながら、永戸専務と野寄専務補佐が目を通してくれました。

## 私の「採れた」島のこと・あの頃の教育者

私は、1963年（昭和38年）に、広島県の瀬戸内海の島（大崎下島）で生まれたんですが、今、よく農業の言葉で「身土不二」と聞きますが、まさにその通りだ、私自身が「採れた」土地は二つとはない、まさにそこしかないと再確認。

ものごころ着いた時から、「広島」っていうのは、「ヒロシマ」でした。それに、「終戦」は「原爆投下」だったし、「敗戦」でした。「8

月6日」が登校日。道ばたにいても、サイレンが鳴ると黙祷をささげます。

多くの人の命日でした。島にも届いた「ピカッ」「ドドーン」のその瞬間を母からよく聞かされました。「なんじゃろうか」と驚いた光と音。そして西の空に昇る入道雲。爆心地の福屋の真下にいて宇品から船で、命からがら助かって帰ってきた人の話。

中学校の音楽の授業は、ソフィア・ローレンに似た先生がピアノを引きながら、「原爆許すまじ」「青い空は」を大きな声で教えてくれました。怒りも悲劇も全く語らず、大きな口をかつ開いて。

呉市に「高校生平和ゼミナール」という取り組みがあって、その担当をしていた太田先生も、沖縄海戦で、自決された太田中尉の息子さんでしたが、ご自身は高校の先生をしながら、平和教育に熱心でした。そういう「犠牲」の上に、今の自分の人生があるというような悲壮感はなく、ストレートに子供達に、「受ける平和から 創り出す平和へ」と一生懸命取り組んでらした。そういう気持ちで真正面から受け、中学生・高校生時代を過ごしていた自分を振り返ると、やっぱり教育者に恵まれていたなあ……と思うのです。

## 土地に根づくこと

今は、滋賀の地域福祉事業所づくりというか、「コミュニティーづくり」をやっているんですけど、ここは自分が生まれ育った町ではないのに、なぜ、これほど熱心にできるのかなあと振り返ると、本当は、過疎であり、農業も衰退する島にいて、その島が活発になるような事をしたいという思いがずっと根底にありながら、これまでいろんな土地を転々としてたんじゃあないのかなあと思うんです。

「故郷は遠きにありて思うもの・・」でしょうか。でも久しぶりに故郷へ帰ってみると、思ってもみなかった人が島に根付いて、「村おこし」や「伝統芸能」を守っている。そんな姿を見ると、ここではもう自分はいらないうな、出る幕はないなあと思うんです。そのエネルギーを爆発させるために、故郷ではない土地が存在するような気がします。こんな思いは私だけでしょうか。

小学5年生の頃に、国語の宿題で俳句を2つ、創ったんです。収穫に追われ、ミカンも暴落して、過剰生産の中で、この先どうなるかなっていう時代でしたけれども。

「みかん取り 正月来るなと母いうなり」

「みかん取り 終わればすぐに 出稼ぎへ」

## 理想の社会像を求めて

小学校3年生頃(1970年)ベトナム戦争の映像が「アサヒグラフ」でどんどん日本にも紹介されていて、島の裏側の集落の歯医者さんで、そのカラー写真を見て、きつかった。そのお医者さんも厳しい事で有名で、行くことすら怖かったのに、そこに置いてある雑誌も怖かった。戦争が終わって間もないんだという認識はあった。すでに15年

経っているんですが、アジアの同じ顔をした人が家を焼かれたり、殺されたりする姿は衝撃的でした。大学で学生運動をしていた姉の影響もあって、中学生になって、ベトナム文学を一生懸命読んでいました。ホーチミンというすごい指導者がいたとか。やはり、戦争のない社会、貧富の差がない社会、平等の社会を理想としたい、そんな事を考えていました。自分なりに理想社会があったから、その後の1989年の中国の天安門事件もショックだったし、ソビエトの崩壊もやはりそうか・・・という認識はありました。事件後、1年位で、中国へその頃所属していたアマチュア劇団の仲間と行って、戯劇学院の人たちと交流しました。上海の町では、「日本人の鬼」と、今、言われたよと通訳から教えてもらい、アジアへの愛着は、哀愁に変わりましたね。最近、北朝鮮の人が日本に対する印象をインタビューされてテレビで報道されてますけど、今だにというか、今も「日本人の従軍慰安婦の歴史を思い出すと、とても不快だ」と若い女性がしゃべっているのを見ると、まさに教育ってすごい力があるし、日本で、歴史をちゃんと教えているかって言うと、曖昧にして過ごすことが多い。私が、受けた平和教育が憎みなさい、恨みなさいではなかった意味が分かる。もし、あの頃、「ヒロシマ」に原爆を落としたアメリカを永遠に憎みなさいと教育を受けていたなら憎んでいただろうか。日本人は、加害者であり被害者だということを、よく教育者は分かっていた。

今を振り返る時も、必ず来る・・・先生、私は、果たしていますか？

2002年(平成14年)を、うんと年をとった時に思い浮かべて、社会への目はどう開

いていただろうと将来、振り返って年表をつくる時があるなら、何と？ 20歳代は、バブルの時代で贅沢な気分を味わったけれど、もう30歳代の後半は、激安の衣料品店や食料品店が生き残っていて、職安は警察が出て自動車の警備にあたるほど、失業者であふれていたし……。その頃、地域福祉事業づくりも3年くらい経っていて、食堂を地域福祉事業所にしていこうと、毎日、ヘルパーの移動の合間に、車で市場へ安くて新鮮な野菜を買いに行っていた。食を経営的に成り立たせるのは大変な事だった。400円の内、130円くらいの食材費でやろうとした。プリの照り焼きに、何とか1枚80円で切り身にしてくれと、スーパーに交渉したり、農家から直接、野菜を配達してもらったり。その頃、産地直送というより、「地産地消」という事も言われていて、できるだけ地元の野菜を食べられるように思っていた。

今、思うと、日本だけが、バブルのような時代が永遠に続くわけなかったし、生活水準は以前の自分と比べたら下がったような気がしたけど、すごい儲けができるんじゃないかという期待を多くの人があきらめていった。あの頃、還暦を迎えた頃にで林さんという頑張りやさんが、趣味で川柳をやっていて、朝日新聞に掲載された句があった。「缶けて 夕焼け雲に ありがとう」全盲のYさんも琵琶湖のそばで独り暮らしだったけど、毎晩、同じガードレールに沿って散歩し、この句を覚えて笑っていた。社会に出ると、教師は身近かにたくさんいるって事にも、その頃から気づき始めたんだ。

私も、少しはあの頃の先生が託した、「受ける平和から 創り出す平和へ」の人生を歩めているだろうか。

そして、今は地域福祉事業所が私の小さな「社会」

時間を今に戻すと、日々・月々のスパンで課題があります。いよいよ今年の4月から栗東市から「精神障害者の訪問介護事業」の委託を受けました。また、これまで物流部門内の食事業も、6月半ばから地域福祉事業へ移管されます。内部の組合員の食事数より地域での配食数が多くなってきたからです。1日50食から90食を作っています。配食サービスは、甲西町の委託事業にもなっています。65歳以上の独居・二人暮らしの高齢者世帯へ毎昼、安否確認を含めて届けています。ある被差別部落の地域では、留守の場合、高齢者の弁当を会館で預かってくれます。会館ののれんに、「人の世に熱あれ 人間に光あれ」と、水平社宣言の言葉が染められています。今だに……と思う反面、現在までも……と、胸にグッと熱いものが湧いてきます。まだ、私のミッションは大丈夫と案じ、軽自動車を走らせるのです。



花崎 昌子（はなさき まさこ）

1963年 広島県生まれ

1986年 日本福祉大学社会福祉学部卒  
神戸須磨北おやこ劇場事務局勤務

1993年 労働者協同組合センター事業団勤務